

書物と妄想力で、カフカが育った時代のプラハ、カルフェン小路の匂いまで感じられる。同じように福音書を噛みしめると、イエス時代のエルサレムやベタニアの匂いが鼻腔に広がる。

ベタニアには、イエスが一人の女に香油を頭から注ぎかけられた、らい病人シモンの家がある(マルコ 14:3)。被差別者の粗末な家、数百万円を流し尽した事件は横目で見て、何よりこの町の空気を味わってみよう。

「ホサナ、祝福があるように(11:9)」とエルサレム入城を熱烈歓迎されたが、イエスたちの定宿はベタニア(11:11)。昼間は神殿でひと悶着起こし(11:15~16)、権威者と対決し(11:27~)、夜はベタニアへ戻っていた(11:19)。イエスはベタニアに滞在し、エルサレム神殿を頻繁に訪れた(12:35,41,13:1)。

聖なる都と、らい病人や被差別民が住む不浄の町。イエスはこれら二つの領域を行き来し、神殿でまがい物の聖性を打ち壊し(11:15~16,27~)、不浄なベタニアでは聖なる福音を示した(14:9)。

イエスによって聖と不浄、義と罪はことごとくひっくり返され、既存の秩序を守ろうとする権威者らの殺意は高まっていく(11:18,12:12,14:1)。

イエスと弟子たちは、最後の晩餐となる過越しの食事をベタニアではなく、エルサレムで食べた(14:16)。その夜、エルサレムとベタニアの間にあるオリーブ山の麓ゲッセマネで祈り(14:32)、そこで逮捕されてしまい(14:46)、ベタニアへはもう戻れなかった。

受難の終着点は「罪を贖う救いの十字架」だが、イエスの教えを直截に受け取れば、価値転換せざるをえない危ないものであった。

イエスの歩みに沿って私たちは弟子として従い、聖なる都と不浄の町を行き来する。そして折々に悔い改め(転換)させられ、私たちの罪や義がひっくり返される。

イエスが歩んだ二つの領域を巡る流れは、その中間地点ゲッセマネで深さへと角度を変える(14:34)。

「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい(14:38)」。だが弟子は三度言われても、目を覚ましていられない(14:41)。「眠りこけて目を覚ましていられない(14:37)」とは比喩だろう。

すぐそこで神(聖)と人(罪)とに引き裂かれているイエス(14:36)を、目をつむって見ていないという意味なのか。

「心は燃えていても肉体は弱い(14:38)」。一般的な精神と肉体のことではない。直訳すれば「霊は元気、肉は弱い」。肉なる私たちは弱い罪人、霊なる私たちは強く聖。私たちはこの二つの領域で存在している。

「主よ、すべて肉なるものに霊を与えられる神よ(民数 27:15)」とモーセは祈った。私たちには与えられている霊があるのだから、イエスの受難を「目を覚まして」見届けることができる。

イエスは言う。「もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される(マルコ 14:41)」。「苦しみの時」が自分から過ぎ去るように祈った(14:35)、その「時が来た(14:41)」のだ。そして弟子たちに「立て、行こう、見よ(14:42)」と呼びかける。

私たちは弱く眠りこけるが、与えられた己が霊によって立ち、行き、神と人に引き裂かれる十字架の恵みを見るだろう。あの女たちのように(15:40)。

「十字架は〜つまずかせ、愚かなものだが〜召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝える(Ⅰコリント 1:23~24)」。私たちは与えられている聖霊で十字架を受け入れ、他者と分かち合う。

《おまけのひとこと》

神なる方が人になって天と地に引き裂かれている キリストだけに限るまい 私たちにも神の霊が備わっているのだから そんな大それたものを土の器(Ⅱコリント 4:7)に納めるところが不可思議な味